ミシュレの作品についての歴史記述的考察

真 野 倫 平
〈南山大学〉

はじめに

本発表の主題は、ジュール・ミシュレ（1798–1874）の作品を19世紀と20世紀の歴史家たちとの関連において歴史記述の面から考察することにある。

フランス革命の後、多くがブルジョワ階級に属するフランスの歴史家たちは、フランスの民衆を主人公とする「国民の歴史」を書くことを自らの使命とした。ミシュレは17巻からなる『フランス史』（1833–67）によってその使命を達成し、フランスにおける歴史学の創立者の一人となった。

彼の死後、実証主義の歴史家たちは彼の作品のロマン主義的性格を激しく攻撃した。しかし20世紀半ばになると、『アナール』誌の創立者の一人であるリュシアン・フェーヴルがミシュレの作品を「新しい歴史学」のモデルとして再評価した。それ以来、ミシュレの作品は歴史家たち、とりわけアナール学派の関心を引くようになった。

本発表においては、ミシュレの作品を19世紀から20世紀の歴史学の流れの中に置き直してみたい。ミシュレはそれ以前の歴史家から何を学んだのか。そしてそれ以降の世代にいかなる影響を与えたのか。これらの交錯する関係を検討することで、ミシュレの作品の独自性を明らかにできるはずである。

1．ミシュレと19世紀歴史学

まず、19世紀初頭の歴史学の状況、特に二つの大きな潮流である哲学派と物語派の対立を検討しよう。これら二つの党派のミシュレに対する影響を明らかにすることで、彼の歴史の独自性を把握することができるだろう。

まず、フランソワ・ギゾー（1787–1874）の作品を取り上げて哲学派の手法を明らかにしよう。彼の『ヨーロッパ文明史』（1828）は1828年のソルボンヌ大学での講義録である。ギゾーは第1課において、自らの歴史の方法を説明するために、歴史的事実を「物質的事実」と「一般的事実」の二つに区別する。

> 近年よく、然るべき理由があって、歴史を事実に限定する必要、物語ることの必要が語られます。これほど正しいことはありません。しかし物語るべき事実は恐らく人が思うよりも数多く、しかも多様に存在するのです。戦闘、戦争、政府の法令といった目に見える物質的事実もあれば、隠れてはいるもののやはり現実に存在する精神的事実もあります。（中略）
>
> 歴史の哲学的部分と通常呼ばれるもの、諸事実の関係、それらを結びつける絆、それらの原因と結果、これらもまた、戦闘の物語や目に見える事実と同様に事実であり、歴史に属するのです[1]。

1　François Guizot, *Histoire de la civilisation en Europe*, Hachette, « Pluriel », 1985, p. 57–58.

「精神的事実」とは、「物質的事実」の間の関係を支配する目に見えない法則にほかならない。歴史の哲学的側面に特別な関心をもつギゾーは、自らの研究対象に「文明」を選択した。彼はこうして、単なる物質的事実を扱うことで満足している物語派の歴史家たちと自らを区別したのである。

次に、物語派の代表であるオーギュスタン・ティエリ（1795–1856）の作品に移ろう。彼は『ノルマン人によるイングランド征服史』（1825）の序説において、なぜ自分が物語的スタイルをとったのかを説明する。ティエリの方法とは、同時代の証人が歴史的事実から受けた生々しい印象をできるかぎり忠実に再現することにある。

> 物語については、私はできるかぎり昔の歴史家の言語に近づくようにした。それが事実と同時代の歴史家であるにせよ、近接する時代の歴史家であるにせよ。（中略）最後に、私は常に物語形式を守ることで、読者が古代の物語から近代の解説に突然移ることがないようにした。そして、年代記の断片に論述を交じえることで生じるような不協和音を、この作品が出さないようにした。また私は、事実や一般的帰結を示す場合でさえも、論述するよりもむしろ物語ることによって、人間集団にも個々の人物にもある種の歴史的生命を与えられるだろうと考えた[2]。

ティエリはこのように、論証よりも提示という方法を選択する。歴史家は「論述するより物語る」ことで、自らの存在を消し去り、事実そのものに語らせることができるだろう。彼はこうして歴史家の不在が物語の真正さを保証すると主張する[3]。

少し遅れて歴史家としての活動を開始した若きミシュレは、先行する二つの党派に対していかなる態度を取ったのだろうか。1869年の『フランス史』への序文において、ミシュレはこの生涯の作品に取り組んだ時期を回想する。彼の目には、当時の歴史学は物質面と精神面の両方において不完全なものに思われた。

> 要するに、歴史学を代表するあれらの傑出した人々（いく人かは賛嘆すべき）のうちに私が見出した歴史学は、二つの方法においていまだ弱いと思われた。
>
> 《あまりに物質的でなかった》。人種を考慮しながらも、土地や、気候や、食物や、多くの身体的、生理学的な環境を考慮しなかった。
>
> 《あまりに精神的でなかった》。法や議事録について語りながらも、思想や、習俗や、国民の魂の大いなる内的な漸進運動について語らなかった。
>
> とりわけ、詳細な学識にほとんど関心がなかった。おそらく、その最上の部分は未刊行史料の中に埋もれたままであった[4]。

ここにある「人種を考慮」する方法がティエリを、「法や議事録について語」る方法がギゾーを指していることは明らかであろう。ミシュレはこのように先人たちの作品を批判した。しかしそれでも彼は、歴史研究の領域を精神と物質の両面で拡大することで、彼らの仕事を継承したのである。

カミーユ・ジュリアンは『十九世紀フランス歴史学注解』(1897) においてミシュレの姿勢をこう説明する。「『この理想』に到達するために、ミシュレは先行する二つの流派の方法を結びつける。物語派からは、活気

2 Augustin Thierry, *Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands*, neuvième édition, Paris, Furne, 1851, 2 vol., t. I, p. 6.

3 ロラン・バルトは19世紀の歴史家や小説家にしばしば認められるこのような考え方を批判している。「かくして、言説のレベルにおいては、客観性――つまり言表者の記号の欠如――は、ある特殊な形の想像物、つまり、指向対象的錯覚とでも呼びうるものの産物、として立ち現われてくることになる。というのも、この場合、歴史家は、指向対象にひとりでに語らせている、と主張するからである」（Roland Barthes, « Le discours de l'histoire », *Le bruissement de la langue*, Editions du Seuil, « Points Essais », 1984, p. 168）〔ロラン・バルト「歴史の言説」花輪光訳、『言語のざわめき』、みすず書房、1987年、171頁〕。

4 Michelet, *Histoire de France*, Editions des Equateurs, 2008–2009, 17 vol., t. I, p. 12.

と精彩があり時代色に彩られた美しい《物語》の趣向を受け継ぐ。哲学派の《システム》からは、政府や社会状態や宗教問題についての研究を借り受ける」[5]。ミシュレは二つの方法のうちの一方を選択したのではなく、両方を取ろうとした。彼は物語と論述を一つの叙述の中で結びつけることで、先行する二つの流派を総合しようとしたのである。

2．哲学の影響――クーザンとヴィーコ

ミシュレの歴史家としての経歴を考える上で、哲学の影響を無視することはできない。若きミシュレは哲学と歴史学の両方に興味を抱き、実際に両方の教科を教えていた。リュシアン・フェーヴルが指摘するように、19世紀初頭にはこの二つの分野は必ずしも対立するものではなかった[6]。ここで、ミシュレにとって最も重要な二人の哲学者、ヴィクトル・クーザンとジャンバッティスタ・ヴィーコを取り上げよう。

ヴィクトル・クーザン（1792–1867）の折衷主義哲学は1820年代には絶大な権威を誇っていた。彼はシェリング、ヘーゲル、ヘルダーなどのドイツ哲学をフランスに紹介していた。彼は若い世代に絶大な影響力をもっており、ミシュレに対してヴィーコの『新しい学』を、エドガール・キネに対してヘルダーの『人類の歴史哲学についての諸理念』を翻訳するように勧めた。彼の歴史哲学は同時代の歴史家たちに理論的基盤を提供した。

1828年のソルボンヌでの講義である『哲学講義』(1828) において、クーザンは歴史の流れは神の意志によって完全に支配されていると主張する。歴史がわれわれの目にどれほど偶然に見えようと、神の目には完全に合理的なのである。「歴史とは、誰もがつぎつぎと負けてゆく賭けです。ただし人類は別で、ある者の勝利においても、別の者の敗北においても、何においても勝利します。（中略）歴史全体においても同様に、すべてがつぎつぎと現れ、すべてが破壊され、すべてが発展し、すべてが歴史の目的の達成を目指すのです」[7]。したがって歴史上の出来事はすべて神の意志の表れにほかならない。

> 歴史は、人類についての神の見解の表れです。歴史の判決は神自身の判決です。（中略）歴史が神の統治の表れであるなら、歴史においてすべては然るべき場所にあります。すべてが然るべき場所にあるなら、すべては善です。なぜならすべては善意の力の示す目的に向かうからです。みなさん、そこから私の講義するこの大いなる歴史的楽天主義が導かれます。それは文明の最初で最後の原理、すなわち人類を作り文明を作った原理、万物の最善のためにすべてを着実に行う原理と関連づけられた文明にほかなりません[8]。

歴史においてすべては「善」である。なぜなら神の目にはすべてが必然であるはずだから。われわれの目にどれほど悲劇的に見える歴史的災厄も、必ずや有益な果実をもたらすことだろう。こうして人類は歴史の弁証法の中で確実に進歩を達成する。この「歴史的楽天主義」は、現在の状況を神の意志の結果と認めさせるかぎりにおいて、ある種の順応主義的性格をはらんでいる。

クーザンの歴史哲学の影響はミシュレの初期作品、とりわけ『世界史序説』（1831）に顕著である。ミシュ

5 Camille Jullian, *Notes sur l'histoire en France au XIXe siècle* suivi de *Extraits des historiens français du XIXe siècle*, Genève, Slatkine Reprints, 1979, p. XLVII.

6 「ミシュレの特異性でしょうか？　とんでもない。彼だけでなく、ジョゼフ・ド・メーストルやバランシュ、ボナルド、そしてキネやオーギュスト・コントもおなじように哲学的な歴史に執着していたのです」（Lucien Febvre, *Michelet et la Renaissance*, Flammarion, 1992, p. 63）〔リュシアン・フェーヴル『ミシュレとルネサンス』石川美子訳、藤原書店、1996年、87頁〕。

7 Victor Cousin, *Cours de Philosophie. Introduction à l'histoire de la philosophie*, Fayard, « Corpus des œuvres de philosophie en langue française », 1991, p. 169.

8 *Ibid*., p. 198–199.

レはそこで歴史を対立する二つの原理、すなわち人間と自然、精神と物質、自由と宿命の戦いと定義する。「世界とともにひとつの戦いが始まった。それは世界とともに終わるべき戦い、それ以前には終わらない戦いである。人間の自然に対する、精神の物質に対する、自由の宿命に対する戦いである。（中略）もしこの序説が目的を達するならば、歴史は永遠の抗議、自由の漸進的勝利として姿を現すであろう」[9]。

この「漸進的勝利」は、人類が東洋から西洋へ移住するにつれて進展する。「東洋から西洋へ、太陽と磁気の流れの道に沿って、人類の移住をたどってみよう。アジアからヨーロッパ、インドからフランスへの長い旅路の上で、人類を観察しよう。宿駅ごとに自然の宿命的な力が減少し、人種と気候の影響がより専制的でなくなるのが分かるだろう」[10]。東から西に向かって人類が進歩するという直線的図式は、クーザンがフランスに導入したドイツ哲学の図式に類似している。

ミシュレにとって重要なもう一人の人物は、18世紀ナポリの哲学者、ジャンバッティスタ・ヴィーコ（1668–1744）である。彼は当時ヨーロッパで支配的であったデカルト哲学を批判した。デカルトが唱える分析的方法の優位を否定し、総合的方法の重要性を主張したのである。そして「クリティカ」と「トピカ」、すなわち判断術と発明術を統合することで、諸学問の包括的な体系を構築しようとした。

> 現代においては、クリティカだけが学ばれ、それに先立つはずのトピカ（発明術）は完全に無視されている。これもまた誤りである。事物の発明は、当然、その真実について下される判断に先立つものである。だからトピカがクリティカに先立たねばならない。前者は、さまざまな理由を提供する《場所》を次々と巡ることにわれわれを慣れさせる。そのおかげでわれわれは、どのような立場にいても、説得のためのあらゆる手段をたちまち見つけられるようになるのだ[11]。

ミシュレは『フランス史』の1869年の序文において、ヴィーコこそ自分が師とした唯一の人物であると述べている。「私はヴィーコのほかに師をもたなかった。生きた力という彼の原理、《人類は自らを創造する》という原理こそが、私の本と私の教育を作った。私は、物々しく不毛なドクトリネールからも、『芸術のための芸術』のロマン派の大潮流からも、距離を置いていた」[12]。ミシュレはこうして同時代人からの影響をきっぱりと否定する。

とはいえ、ヴィーコの影響はミシュレ自身が言うほど絶対的なものであっただろうか。歴史家としてデビューした頃、ミシュレはクーザンの歴史哲学の影響下にもあった。すでに見たように、ミシュレは『世界史序説』において、ヴィーコの「繰り返し」*corso*, *ricorso* という循環的図式ではなく、歴史哲学の直線的図式を採用した。また、1827年にヴィーコの『新しい学』の翻訳を出版した時、ミシュレはそれに『歴史哲学の原理』という題名をつけた。原題には含まれない「歴史哲学」の語を用いることで、ミシュレは当時絶大な権威を誇っていたクーザンに対してある種の敬意を表明したのである。

しかしその後、ミシュレはあまりに「宿命論的」と思われたクーザンの歴史哲学から急速に遠ざかった。それに対してヴィーコの哲学は、歴史の運動の主導権を民衆の自由意志に与えた点で、フランスの民衆を自らの歴史の主人公にしようと意図していたミシュレをますます魅了した。

> 『新しい学』の言葉はこうである。《人類は自らの作品である》。神は人類にはたらきかけるが、それは人類自身によってである。人類は神のようであるが、神のような人間はいない。あれらの神話上の英雄たち、両腕で山々を引き離したヘラクレスたちや、一生のうちに何世紀もの長大な作品を達成したリュ

9 Michelet, *Introduction à l'histoire universelle*, *Œuvres complètes*, Flammarion, t. II, 1972, p. 229.
10 *Ibid*.
11 Michelet, *Œuvres choisies de Vico*, *Œuvres complètes*, Flammarion, t. I, 1971, p. 352.
12 Michelet, *Histoire de France*, t. I, p. 14.

クルゴスやロムルスたちは、諸民族の思考の創造物なのである[13]。

さらに、ヴィーコによる古代神話の分析は、グリムの民話研究とともに、ミシュレに民俗学的研究への強い興味をかきたてた。彼は『フランス法の起源』（1837）において、ヴィーコの方法を取り入れて古いフランス法を分析した。

以上のように、クーザンとヴィーコはそれぞれの方法で若きミシュレに大きな影響を与えた。クーザンは同時代の権威ある哲学者として、歴史の進歩主義的図式を提供した。それに対してヴィーコの哲学は、その自由意志の原理と総合的性格によってミシュレを魅了した。ミシュレは飽くなき好奇心をもって、時に矛盾し合うこれらの多様な要素を貪欲に受け入れたのである。

３．ミシュレと20世紀歴史学

次に、ミシュレと20世紀歴史学の関係を検討しよう。第三共和政下において、歴史家たちは歴史学を実証科学として確立し、大学のプログラムに組み込もうと試みた。ソルボンヌ大学の教授であるシャルル＝ヴィクトル・ラングロワ（1863–1929）とシャルル・セニョボス（1854–1942）は、歴史学専攻の学生のためのマニュアルとして『歴史学研究入門』（1898）を刊行した。彼らはそこでミシュレの作品の学問的価値をはっきりと否定し、歴史学の客観的方法を確立しようとした。

ラングロワとセニョボスは、歴史家の作業の中でも史料批判に最大の重要性を置いた。彼らは自分たちの本の中で、そのさまざまな手順を微に入り細にわたって説明した。当然、「総合的作業」よりも「分析的作業」（すなわち批判）に多くのページを割いた。

> このように、歴史学研究は、すぐれて批判的な研究である。本能に対する防御の姿勢を執らないままで、歴史学研究に乗り出すことは、そこに溺れるようなものである。この危険を知るためには、人間の意識を検証し、かの「怠惰」の原因を分析して、それが精神の批判的姿勢に取って代わられるまで闘うこと以上に、効果的なやり方はない[14]。

しかし一部の歴史家はこうした実証主義的な方法に満足しなかった。それは彼らの目には、史料の豊かさを利用するにはあまりに狭量なものに見えた。リュシアン・フェーヴル（1878–1956）とマルク・ブロック（1886–1944）はこうした実証主義の歴史家たちを激しく批判した。彼らは1929年に『アナール』誌を創刊し、歴史学に根本的な変革をもたらそうとした。

『アナール』の革命とは、何よりもまず、歴史研究の領域を大胆に広げたことにある。フランソワ・ドッスは『粉々になった歴史』（1987）の中でこう説明する。「『アナール』は歴史の言説を根本から一新した。第一に、この雑誌の題名から想像できるように、それまで無視されてきた経済的、社会的な現象を特に重視した」[15]。そしてまさにこの点において、ミシュレはアナール学派の歴史家たちの先駆者の一人と見なされる。フェーヴルは1942–1943年度のコレージュ・ド・フランスの講義（1992年に『ミシュレとルネサンス』の題で刊行される）において、ミシュレが初めて真に「全体的」で「総合的」な歴史学の方法を打ち立てたと主張する。

> 今日の言葉をもちいて言いますと、1840年におけるミシュレの方法はふたつの語によって定義され

13 Michelet, Avant-propos à l'*Histoire romaine*, *Œuvres complètes*, t. II, p. 341.

14 Charles-Victor Langlois et Charles Seignobos, *Introduction aux études historiques*, Kimé, 1992, p. 70.〔セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』八本木浄訳、校倉書房、1989年、54頁〕

15 François Dosse, *L'histoire en miettes*, La Découverte/Poche, 2010, p. 64.

ます。全体的であることと、総合的であることです。

全体的であるというのは、人間の多様な活動のうちのどれかひとつを――たとえば政治的活動や、あるいは法律的活動、宗教的活動などを――再現することが歴史家の仕事なのではない、としているからです。(中略)

総合的であるというのは、それぞれの歴史家が政治史や法律史や芸術史などをべつべつに研究して、各人が自分の専門分野に閉じこもり、隣の分野にはまったく無関心であるというのでは充分ではない、としているからです[16]。

『アナール』のもう一つの革新は、歴史家の主体的な役割を擁護し、「問題としての歴史」という考えを主張したことである。「このアナール学派のもう一つの革新的側面は、問題としての歴史を評価したところにある。マルク・ブロックとリュシアン・フェーヴルにとって、歴史家は史料の口述するままに書くだけで満足するのではなく、それらに質問を投げかけ、それらを問題の中に組み込まなくてはならない。ラングロワとセニョボスの物語としての歴史に対して、彼らは問題としての歴史を奨励する。それが将来の構造的歴史の概念化の理論的母胎となるのだ」[17]（ドッス）。そしてこの点に関しても、フェーヴルが指摘するように、ミシュレは自らの作品の「党派性」を宣言することで歴史家の主体的役割をはっきりと擁護した。

その結果として、いかなる歴史学であれ、客観的であることをどれほど主張しようとも、また実際にいかに客観的なものであったとしても、どうしても主観的な性格をもつようになります。結局のところ、歴史学のなかで唯一客観的であるものは年表です。(それもどうでしょうか！)（中略）だがそれも、年表が複雑になったり、事件があまり単純ではなくて他の事件と互いに関連していたりすると、たちまち状況は一変します。客観性などと言ってはいられません。ミシュレはそのことをわかっていましたし、事実、そう述べてもいます。彼のこの結論から逃れる術があるとは思えません[18]。

このように、ミシュレの作品はアナール学派の歴史家たちにとって「新しい歴史学」の特権的モデルであり続けた。「しかし、歴史の概念が『アナール』のそれと最も近いように見える者は、統計という道具をもたず、ロマン主義を余計にもっているが、ジュール・ミシュレである。彼は今日では、遅ればせながら列聖された、新しい歴史学の教皇と見なされている」[19]（ドッス）。ミシュレの習俗や、異端や、身体や、地理に対する関心が、今日の歴史家たちに無数のヒントを与えているのである。

おわりに

ミシュレの今日の歴史学に対する影響は、いくら強調してもしすぎることはない。例えば、歴史記述研究の重要な成果である『記憶の場』(1984–1992）において、ピエール・ノラはミシュレをあらゆる記憶が集中する特権的な場として扱っている[20]。歴史記述の問題が議論される時、ミシュレはしばしば引き合いに出される。ここではそのような例をただ一つだけ取り上げよう。歴史記述における物語の役割についてである。

物語の役割は、19世紀の物語派と哲学派の対立以来、歴史学の重要な問題であった。20世紀になると多

16 Lucien Febvre, *op. cit.*, p. 108.〔邦訳、143–144頁〕
17 François Dosse, *op. cit.*, p. 69–70.
18 Lucien Febvre, *op. cit.*, p. 118–119.〔邦訳、158頁〕
19 François Dosse, *op. cit.*, p. 88.
20「ミシュレはありうべきあらゆる記憶の場を超越する。なぜなら万人の中で彼こそがこれらの『記憶の場』の軌跡にして共通点であり、その魂であるからである」(Pierre Nora, « La nation-mémoire », in *Les Lieux de mémoire*, « Quatro », Gallimard, 1997, 3 vol., t. II, p. 2209)。

くの歴史家が実証主義世代の「事件の歴史」を攻撃した。彼らは歴史記述における物語の役割を否定し、「物語としての歴史」を「問題としての歴史」で置き換えることを主張した。それでも、一部の歴史家は物語を擁護するのをやめなかった。例えばポール・ヴェーヌは『歴史をどう書くか』(1971) において、歴史とは「真実の物語以外の何物でもない」と宣言した。そして、歴史家は客観的方法を空しく追求するよりも、ヴィーコに倣って「トピカ」を豊かにすることに専念すべきだと主張した[21]。

哲学者のジャック・ランシエールもまた『歴史の名』(1992) において物語の重要性を擁護した。彼の指摘によれば、今日の歴史家は歴史の「科学化」のジレンマに陥っている。すなわち、彼らは自らの研究の客観性のために物語の豊かさを犠牲にしているのだ。ランシエールは彼らに対し、このジレンマから抜け出すために、「歴史」という語のもつ両義性(「物語としての歴史」と「科学としての歴史」)を利用するよう呼びかける。

> 当時の歴史学革命に固有なことは、単に長期持続や物質文明や大衆の生活といった新しい対象を定義できたとか、それらに数字言語という新しい道具を適用できたとかいうことではない。科学主義の時代の誘惑の歌のうちに、その破滅の脅威を、科学化の提案の下に隠された「物語か科学か」というジレンマを、認めることができたということなのだ。すなわち、それに対する答えとして、同形異義性のはたらきを固持することができたということなのだ。なぜならそれだけが選言を連言に変えて「物語と科学と」にすることができたからである[22]。

ランシエールによれば、ブローデルやル・ロワ・ラデュリといったアナール学派の一部の歴史家は、固有の言語を発明することでこのジレンマを克服した。さらに彼は、ミシュレをこの歴史記述革命の先駆者として位置づける。「ミシュレは、新しい歴史学のエクリチュールを特徴づける、この時間システムの革命の先駆者である」[23]。このようにミシュレの歴史は、今もわれわれに新たな問題を投げかけ続けている。

21「じつを言うと、通則論【トピカ】という発想ほど有益で、それにもかかわらず無視されてきた発想は、二つとないくらいである。この種の目録は、創意工夫を容易ならしめる。すでにヴィーコの時代から、ヴィーコ自身が嘆いていた。政治の歴史家と哲学者は、批評だけに肩入れして、通則論【トピカ】を無視してきた、と」(Paul Veyne, *Comment on écrit l'histoire*, « Points Histoire », Seuil, 1996, p. 287–288)〔ポール・ヴェーヌ『歴史をどう書くか』大津真作訳、法政大学出版局、1982年、397頁〕。

22 Jacques Rancière, *Les noms de l'histoire. Essai de poétique du savoir*, Editions du Seuil, « La librairie du XXe siècle », 1992, p. 18.

23 *Ibid*., p. 101.